

II. 大学体育必修化への回帰に向けての方略

II-1. 挑戦的課題達成型テニス授業によるポジティブな徳性の向上効果

藤原 大樹

目的

挑戦的課題達成型を導入したテニス授業の学修成果を明らかにするため、授業前後におけるポジティブな徳性、テニスの自己効力感、テニススキルの変化を検討した。

方法

1. 対象

2022年度後期に開講された「健康スポーツ教育II」の受講者124名のうち、データの揃った学生87名を分析対象とした。

2. 測定尺度

1) ポジティブな徳性

体育授業におけるポジティブな徳性を測定するため、体育授業版ポジティブな徳性尺度(橋本ら, 2021)を使用した(資料1参照)。この尺度は勇気、正義、人間性と愛、節度、超越性、知識と知恵の6領域計24項目で構成されている。

2) テニスの自己効力感

授業におけるテニススキルの自己効力感を測定するため、佐久間ら(2017)が作成したソフトテニスにおける自己効力感尺度を使用した。本研究では、実施した種目がソフトテニスではなく硬式テニスであること、受講者の多くが初心者であり、習得を目指すスキルレベルが低いことから、項目の修正を行った。

3) テニスのスキル

テニスのスキルを評価するために、ラリーテストとサーブテストを実施した。ラリーテストは9回あるチャンス(3人と3回ずつ)のうちの最長回数、サーブテストは10本(左右5本)のうちの成功回数を記録した。

3. 介入法

初回授業時に冊子を配布し、①挑戦的目標設定、②目標の振り返りレポート、③人間性向上プログラム、④リーダーシップ体験を実施した。

結果と考察

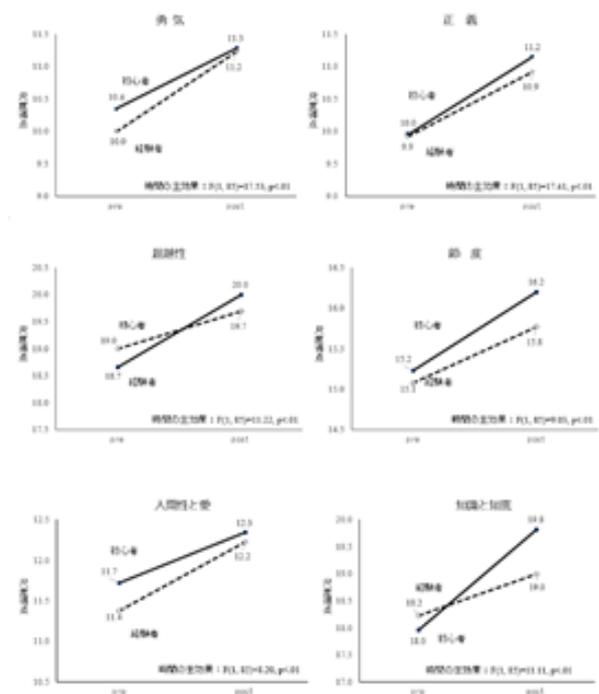
授業前後における受講者のポジティブな徳性、テニスの自己効力感、テニススキルの変化を検討するため、ポジティブな徳性の6つの下位因子を従属変数とした時間(前・後)×テニス経験(初心者・経験者)

の二要因分散分析を行った。その結果、ポジティブな徳性においてはすべての下位因子において授業前より授業後の得点が有意に増加した(表II-1, 図II-1)。ただし、すべての因子において効果量(η^2)は小さかった(0.09-0.17)。なお交互作用とテニス経験の主効果は認められなかった。また、テニスのスキルテストおよびテニスの自己効力感についても授業前後において有意に高まった。

これらの結果は、挑戦的課題達成型を導入したテニス授業が受講学生のテニスの自己効力感やテニススキルの向上につながるだけでなく、ポジティブな徳性を高める可能性を示唆している。ただし、本研究においてはコントロール群が設定されていないことや、同時に複数の介入法を実施しており、授業効果がどのように表れるかのメカニズムが不明瞭であることなど、いくつかの限界が存在する。したがって、今後も研究の方法論を改善しながら、効果的な挑戦的課題達成型授業の構築に取り組む必要があると考える。

表II-1. ポジティブな徳性の変化

	pre		post		4要素		7領域
	mEdof n=74	経験者 n=13	mEdof n=74	経験者 n=13	F	F	F
勇気	10.35 (1.82)	10.00 (2.08)	11.28 (1.66)	11.23 (1.59)	17.53**	0.19	0.33
正義	9.95 (1.98)	9.92 (2.18)	11.15 (1.87)	10.92 (1.75)	17.41**	0.06	0.15
人間性と愛	18.66 (2.52)	19.00 (2.16)	20.00 (2.52)	19.69 (1.75)	11.22**	0.00	1.13
節度	15.23 (2.08)	15.08 (1.98)	16.20 (2.20)	15.77 (1.83)	9.03**	0.26	0.26
超越性	11.72 (1.93)	11.38 (1.89)	12.34 (1.59)	12.23 (1.01)	8.20**	0.23	0.19
知識と知恵	17.96 (2.87)	18.23 (3.63)	19.82 (2.59)	19.00 (2.55)	11.11**	0.14	1.92



図II-1. ポジティブな徳性の変化